

児童・短大生の異文化理解

今井靖親・橋本佳和*
(心理学教室)

A Questionnaire Survey of Intercultural
Understanding in Children and Junior
College Students

Yasuchika IMAI・Yoshikazu HASHIMOTO
(Department of Psychology)

要旨：小学校6年生の児童と女子短大生を対象に、外国に関する態度・関心・知識について質問紙調査を行い、その実態を分析した。その結果、次のことが明らかになった。(1) 異文化に対する態度は、短大生では「やや積極的」であったが、児童は「積極、消極どちらともいえない」段階であった。(2) 異文化への関心は、全体的に強くはなかったが、児童と比較して、短大生のほうが、ややまさっていた。(3) 異文化に関する知識(特に地理的知識)は、全体的に低く、短大生でも正答率が50%に達しなかった。(4) その他、「行ってみたい国」として、欧米の国を挙げる者が多く、「知っている国」については、中国と韓国以外の東南アジアの国を挙げる者が少なかった。

キーワード：異文化理解、質問紙調査

I. 目的

「国際化」の時代といわれる現在、海外旅行や留学・海外赴任や海外出張など、海外への進出が増加している。一方では国内においても外国人労働者が年々増え、全国いたるところでその姿を見かけるようになってきた。かつては、国内における外国人といえば、ビジネスマンか観光客か留学生であることが多かったが、今や、そういう状況は大きく変わろうとしている。また、情報化社会の到来とともに、円高や国際紛争などの世界の出来事が、日本人の生活にも直接的な影響を与えるようになってきている。このように、異文化との接触が増加するのにもとめない、日本人として、十分な国際性を身につける必要性が高まりつつある。

いっぽう、教育界においても、「国際化・情報化」あるいは「国際理解」、「国際人の育成」などという言葉が、臨時教育審議会や教育課程審議会の答申、さらには新学習指導要領などにおいても頻繁に使用されるようになった。これは、学校現場においても、国際性の獲得を目指す教育が重視されてきていることを示唆している。

ところで、学校現場での国際理解を深める学習として、どのような領域や内容が考慮されるべきなのであろうか。例えば、わが国と他国・他民族の人々の暮らしや生活文化の違いを知り、その背後にある地理的・社会的条件からくる習慣や価値観を理解することも必要であらう。また、輸出品

* 浮孔小学校(現在は、本学大学院学校教育専攻)

や輸入品についてとりあげるだけで、自分たちの生活が、現代の世界における相互依存的な関係のうえに成り立っていることがわかるし、国際協力の取り組みや国際化の進展にともなう諸問題の出現という観点からも国際関係を考えることができるだろう。その他では、環境問題、人口問題、食料問題、資源エネルギー問題といった、人類が地球レベルにおいて解決を迫られている課題にも、目を向けることが必要である。

それでは、国際化が進む現代社会の中で、具体的に児童・生徒の国際認識はどのような状況にあるのだろうか。東京学芸大学附属学校（世田谷地区、1980）¹⁾では、基礎的な実態調査として、外国のなかで行きたい国、すぐれた文化をもつ国、日本の文化に大きな影響を与えたと思う国を小学校3年生から小学校6年生に挙げさせ、外国に関して、児童・生徒が抱いているイメージや基本的知識について調べている。それによると、行きたい国は、スイス、アメリカ、フランス、カナダ、中国、オーストラリアなどであった。このことから、小学生は景色の美しい外国に行きたいと願っていると解釈される。また、すぐれた文化をもつ国は、アメリカ、エジプト、中国、ソ連、イタリア、イギリス、日本などであった。これについてはマスコミ等の情報によって形成されたイメージによって左右されているらしいこと、小学生にとって文化の意味内容のとらえ方が困難だったことが指摘されている。最後に、日本の文化に大きな影響を与えた国としては、中国、アメリカを挙げる者が圧倒的に多かった。これについては身の回りの生活用品の存在や社会科学習による結果だと考えられている。

最近、東京学芸大学附属学校（小金井地区、1992）²⁾でも国際理解に関する子どもの実態を把握するために、日本と外国に対する認識や外国に対する意識を調べるアンケート調査を実施している。調査内容は、日本とつながりがあると思う国とその理由、暮らしてみたい国とその理由を挙げるというものであった。被験者は、小学校3年生から、中学校3年生まで各学年50名であった。つながりがある国としては、アメリカ、中国、ソ連、オーストラリア、韓国、サウジアラビアが挙げられたが、これらは学習による成果と、マスコミの影響だと考えられている。また、暮らしてみたい国では、アメリカ、オーストラリア、スイス、イギリス、フランスなどが上位に挙げられているが、これらは子ども達に与えられて情報がプラスかマイナスか、つまり、自然環境、生活環境、治安状態、文化遺産などの情報によって変動すると受けとめられている。

いっぽう、国際理解の実態を把握するための測定用具として、国際理解テスト（APWUI）の標準化が行われている（吉森、永井、太鼓矢、1974）³⁾。このテストは、Ⅰ、権威主義的傾向 Ⅱ、公害に対する態度 Ⅲ、戦争に対する態度 Ⅳ、国連に対する態度 Ⅴ、国際関係に対する態度という5つの下位領域に分けられている。しかしながらこれらは、いずれの領域も、態度形成に関するものであり、態度以外の国際理解を深める要因については全く検討されていない。そのうえ、標準化がなされてから約20年が経過しており、最近の実態を適切に把握しえない内容になっているように思われる。

このように従来の異文化理解に関する調査は、数も限られているうえに、国際情勢が目まぐるしく変化する現代社会の中で、児童・生徒の異文化理解の実態を把握するのに十分な基礎データを提供するものとはなっていない。今日では、児童・生徒の異文化理解がどのような領域で、どのように深められていくのかを明らかにするための基礎的な情報収集が必要となってきた。

そこで本研究は、小学校6年生の児童と短大生を対象に、外国あるいは異文化に関する態度、関心、地理的知識について調査を行い、その実態を発達的にとらえることを目的とする。

Ⅱ. 方法

調査対象 奈良県下のU小学校6年生90名、N短期大学1回生92名。

材 料 外国に関する態度、関心、地理的知識を調査するために作成された31問からなる質問紙。外国に関する態度や関心についての質問には、5件法（そのとおりです。どちらかというとうです。どちらともいえません。どちらかというちがいます。まったくちがいます。）による回答をさせ、外国の地理的知識に関する質問に対しては自由記述をさせた。

手続き 各学級、教室において集団無記名で実施した。質問紙については予めテストではないことを告げ、質問項目1から順に31まで回答させた。所要時間は30分～40分程度であった。

Ⅲ. 結果と考察

調査内容ごとの回答方法及び得点化 異文化理解についての本調査の内容は、以下の3領域から構成されている。各領域ごとの回答方法と得点化は次のとおりである。

①態度 態度については、13項目の質問を5件法で回答させた。得点範囲は13～65点で、得点が高いほど異文化に対する積極的な態度を示す。

②関心 関心については、5項目の質問を態度と同様5件法で回答させた。得点範囲は5～25点で、得点が高いほど異文化に対する関心が高いことを示す。

③地理的知識 地理的知識については、12項目の質問を自由記述で回答させた（ただし、質問項目23、24は複数回答となる）。正答に1点を与え、得点範囲は0～22点で、得点が高いほど地理的知識が豊富なことを示す。なお、項目27、28は異文化についての地理的知識とは異なるため、得点化はしなかった。

次に、各領域ごとに児童と短大生の成績について比較し、その全体的な特徴と各項目ごとの特徴を明らかにする。

1. 態度について

態度については、満点65点に対し、児童の平均得点は42.67点（ $SD=7.61$ ）、短大生の平均得点は48.07点（ $SD=5.77$ ）であり、両群の得点間には有意差が認められた（ $t=7.52$ 、 $df=180$ 、 $p<.001$ ）。5件法に即してみれば、児童の平均は3.2、短大生は3.7となる。これは児童では、『どちらともいえない』に近く、短大生では、『どちらかというとうです』に近い。したがって、異文化に対する態度は、全体的にやや消極的であるが、児童と比べて短大生のほうが積極的であるといえる。次に、それぞれの項目の中で児童と短大生の得点の間に有意差がみられたのは、

項目1《外国の人が、日本語が話せなくて、道にまよっているのをみかけたら、すすんではなしかけます。》（ $t=2.34$ 、 $df=180$ 、 $p<.05$ ）

項目2《食べるときは、手で食べることになっている国の人たちと食事をするときは、わたしも手で食べます。》（ $t=4.12$ 、 $df=180$ 、 $p<.001$ ）

項目3《ある国では、信号が赤でも車が来ないときは、道をわたってもよいということになっています。その国に行ったら、わたしは、信号が赤でもわたります。》（ $t=6.60$ 、 $df=180$ 、 $p<.001$ ）

項目5《外国には、お金をはらわないと使えないトイレ、ドアのついていないトイレなど、日本のトイレとはちがったものがあります。その国に行ったら、べつに気にしないで、わたしは

そのトイレを使います。》($t=3.89$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

項目7《外国の人をまねて、わたしの家でいっしょに生活することになったら、わたしは、ぜひいっしょにくらしたいです。》($t=5.14$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

項目8《外国で、その国の人の家へいっしょに住むことになったらわたしは、ぜひいっしょに住みたいです。》($t=7.17$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

項目10《外国では、あくしゅをしたり、だきあったりしてあいさつをします。わたしもその国に行ったら、その国のあいさつのしかたで、あいさつします。》($t=9.71$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

項目11《しゅうがくりょうで外国に行こうということになりました。わたしは、ぜひさんかしたいです。》($t=5.06$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

の8項目であった。そのうち、項目1だけは、児童の方が短大生より得点が高かった。この結果から、児童は外国の人が困っているのを見かけたらとにかく助けようという姿勢が見られる。しかし、短大生になると、外国語に自信がないためか、積極的に話かける態度が乏しいといえるのではないだろうか。その他7つの項目は、すべて短大生の方が得点は有意に高かったが、項目7、項目8、項目10などは特に両者の間で得点差が大きく、外国語を学んでいる短大生の方が外国の人との交流や生活を一緒にするというところに、許容的であるといえる。また、食事、排泄、清潔、基本的な生活習慣についても、短大生の方がより積極的な傾向が伺える(図1参照)。

2. 関心について

関心については、満点25点に対し、児童の平均得点は16.90点($SD=3.23$)、短大生の平均得点は18.09点($SD=3.31$)であり、両群の得点間には有意差が認められた($t=3.41$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)。5件法に即してみれば、児童の平均は3.4、短大生の平均は3.6となる。このことから、異文化に対する関心は、全体的にそれほど強くはないが、児童に比べて短大生の方がややまっさっているといえよう。

次に、それぞれの項目の中で児童と短大生の得点の間に有意差がみられたのは、

項目14《わたしは世界のニュースに関心があります。》($t=3.55$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

項目15《わたしは地球のかんきょう問題に関心があります。》($t=3.54$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

項目17《わたしはいろいろな国の人と友だちになりたいです。》

($t=3.60$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)

の3項目であり、これらはすべて、児童より短大生の方が得点が高かった。ここ数年、自分の国だけでなく世界全体を視野に入れたグローバルな考え方が求められているが、短大生において項目14、15、17に、その意見が反映されているように思われる。つまり、児童と比べて短大生は、世界のニュース、地球の環境、外国人との交流に高い関心を示していることがわかる(図2参照)。

3. 地理的知識について

地理的知識については、満点22点に対し、児童の平均得点は5.87点($SD=3.56$)、短大生の平均得点は10.76点($SD=4.13$)であり、両群の得点間には有意差が認められた($t=11.89$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)。この領域に関する全体の正答率は、児童の場合27%、短大生は49%である。このことから、本調査に関するかぎり、地理的知識については全体的にきわめて低いといえる。

次に、それぞれの項目の中で児童と短大生の得点の間に有意差がみられたのは、

項目19《夏に日本よりも暑い国の名前を知っていたら一つだけ書いてください。》

($t=3.93$ 、 $df=180$ 、 $P<.001$)



図1 態度領域の平均得点

項目20《冬に日本よりも寒い国の名前を知っていたら、一つだけ書いてください。》

($t=5.18$, $df=180$, $p<.001$)

項目21《世界の中には、食べ物なくて、人びとが苦しんでいる国があります。その国の名前を知っていたら、一つだけ書いてください。》($t=4.76$, $df=180$, $p<.001$)

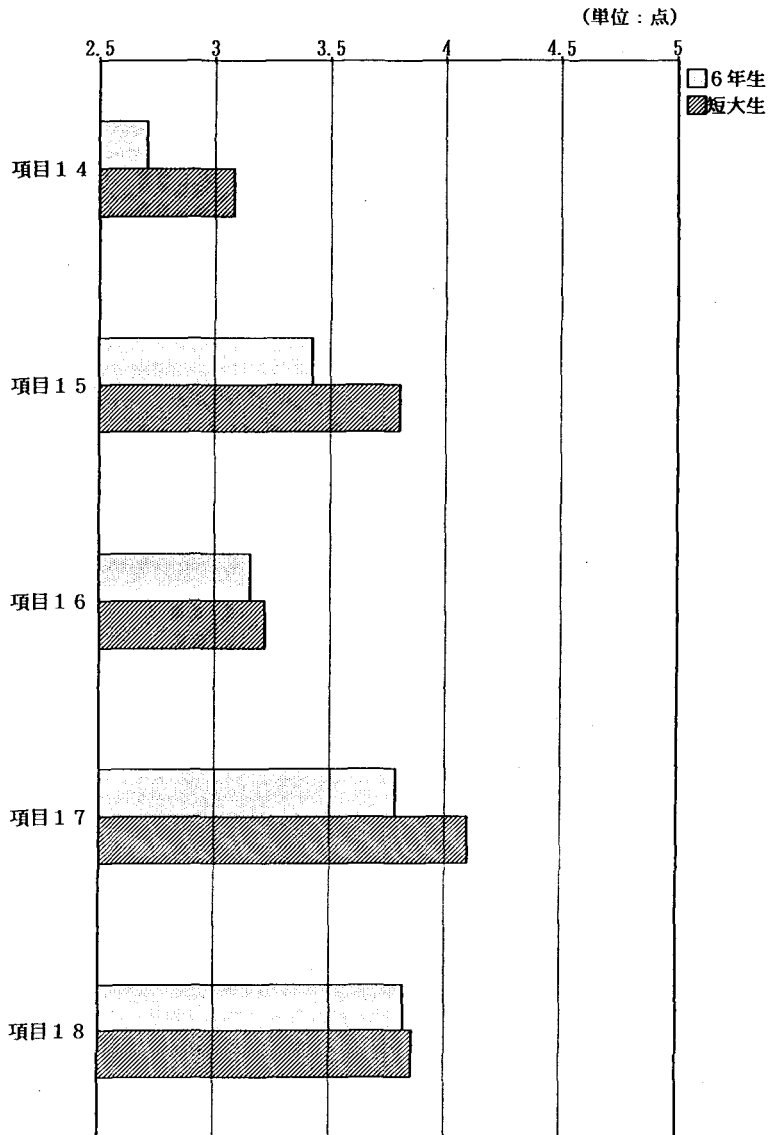


図2 関心領域の平均得点

- 項目22 ≪日本には、約1億2000万人の人が住んでいます。日本より、たくさんの人が住んでいる国の名前を知っていたら、一つだけ書いてください。≫ ($t=6.16$, $df=180$, $p<.001$)
- 項目23-1 ≪日本は、外国からたくさんの品物を買っています。その品物の名前を知っていたら、一つ書いてください。≫ ($t=3.11$, $df=180$, $p<.01$)
- 項目23-2 ≪日本は、外国からたくさんの品物を買っています。その品物の名前を知っていたら、二つ書いてください。≫ ($t=2.25$, $df=180$, $p<.05$)
- 項目23-3 ≪日本は、外国からたくさんの品物を買っています。その品物の名前を知っていたら、三つ書いてください。≫ ($t=2.69$, $df=180$, $p<.01$)

項目24-1 ≪日本は、外国へたくさんの品物を売っています。その品物の名前を知っていたら、一つ書いてください。≫ (t=2.08、df=180、p<. 05)

項目25-1 ≪世界の国の中で、いまでも戦争をしている国がありますか。≫
(t=4.77、df=180、p<. 001)

項目25-2 ≪「ある」に○をつけた人は、その国の名前がわかったら名前を一つだけ書いてください。≫ (t=2.95、df=180、p<. 01)

項目26 ≪あなたは、外国人と聞いたとき、一番はじめにどこの国の人を思いうかべますか。その国の名前を一つだけ書いてください。≫ (t=3.79、df=180、p<. 001)

項目29 ≪次の世界地図の①～④のうち、さばくはどこですか。≫
(t=4.15、df=180、p<. 001)

項目30-1 ≪次のアジアの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。大韓民国≫ (t=5.22、df=180、p<. 001)

項目30-2 ≪次のアジアの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。中国≫ (t=10.67、df=180、p<. 001)

項目30-3 ≪次のアジアの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。インド≫ (t=11.58、df=180、p<. 001)

項目30-4 ≪次のアジアの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。フィリピン≫ (t=7.12、df=180、p<. 001)

項目31-1 ≪次のヨーロッパの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。イギリス≫ (t=11.58、df=180、p<. 001)

項目31-2 ≪次のヨーロッパの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。フランス≫ (t=5.62、df=180、p<. 001)

項目31-3 ≪次のヨーロッパの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。スペイン≫ (t=7.86、df=180、p<. 001)

項目31-4 ≪次のヨーロッパの地図の①～④の国のうち、知っている国の名前を書いてください。イタリア≫ (t=14.48、df=180、p<. 001)

の20項目であった。地理的知識では、学習期間が長い短大生の方が、当然のことながら得点が高かった。児童と短大生がともに高い得点を示した項目は、①項目22、②項目23-1、③項目24-1、④項目26であった。これらは、具体的には、それぞれ①日本より人口の多い国、②輸入品（一つだけ）、③輸出品（一つだけ）、④外国人とはどこの国の人か、を尋ねたものである。これらは日常生活とかわりも多く、新聞、テレビ、ラジオといったマスメディアを通じて広く知られていることが高得点につながった理由の一つであろう。

これに対して、児童と短大生がともに低い得点を示したのは、輸出品（二つ）あるいは（三つ）といったものや、今も戦争をしている国の名、地形図を見てフランスという国名を記入するものなどの項目であった。これらは、知識としては浅くしか、とらえられていないので、すこし深い内容まで掘り下げて質問されると答えられないものだったと思われる。特に地形図から国名を書く質問は、ほとんどの児童が回答できなかった。これは、国の名前はよく聞いたりしているが、位置関係については全くといってよいほど知らないことを示唆している。そういう意味では短大生でも、中国はかなりよく知られている国の一つであるが、フィリピン、フランス、スペインなどはあまり知られていない国だと言えよう。今後は、単なる国名だけではなく、地図上の場所も同時にきちんと

教えるような教育が必要なのではないだろうか。

ところで、項目25-2に関しては、児童と短大生ともに得点は低いのであるが、児童の方が得点が高く、両者の間に統計的な有意差があった。これは調査対象の小学校では、6年生が広島への修学旅行に行く事前指導として、平和学習をしているために、戦争をしている国の名前を知っていたからだと思われる。

地理的知識における22項目のうち、項目24-2、24-3だけは、両者の間に有意な差はなかった。



図3 地理的知識領域の平均得点 (項目19～項目25-1)

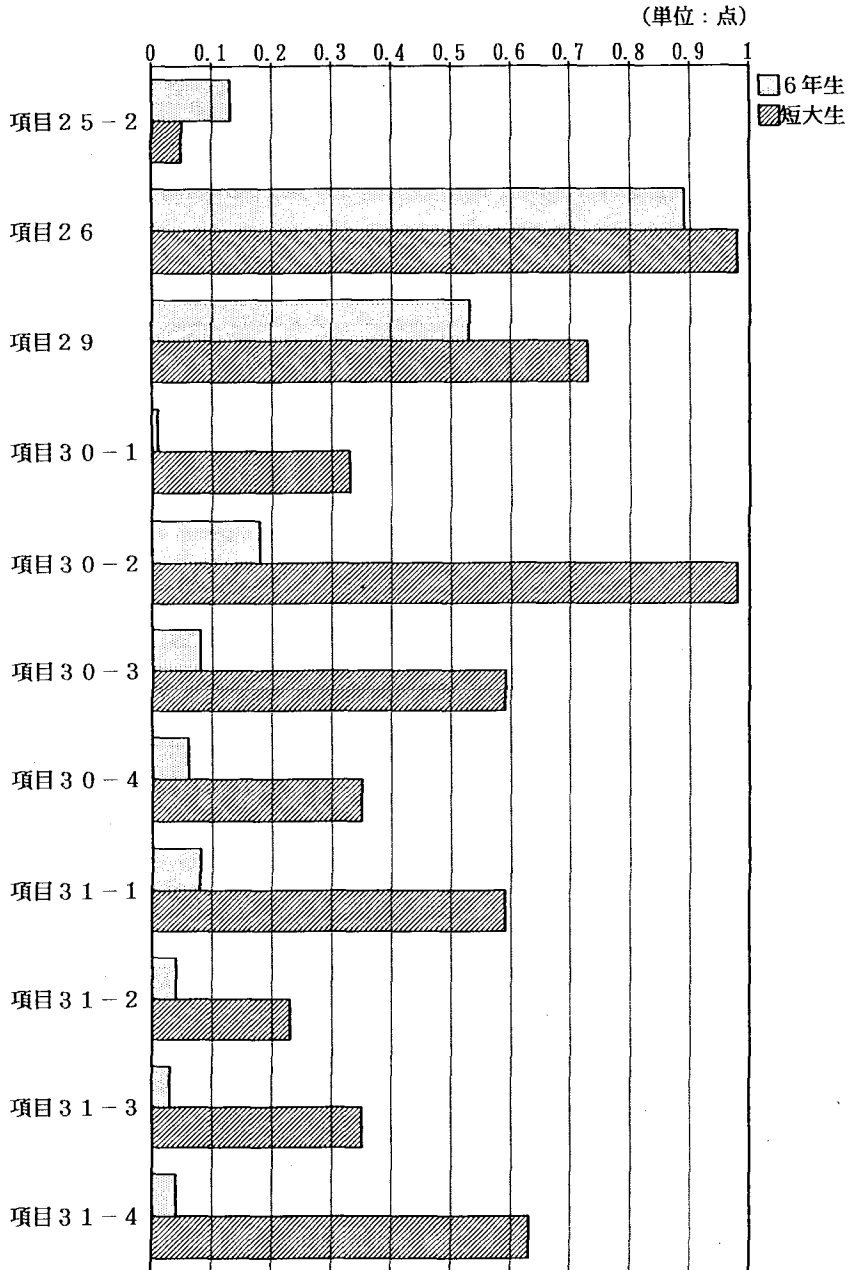


図4 地理的知識領域の平均得点 (項目25-2～項目31-4)

これは、児童も短大生も日本の産業についての常識的な知識を備えていないことを示している (図3、図4参照)。異文化理解を深めるためには、まず自分の国のことについて十分に知ることが必要ではないだろうか。

なお、前述したように項目27、28は異文化についての地理的知識とは異なるため、得点化は行わ

なかったが、行ってみたい国としては、オーストラリアとアメリカが突出していて、そのあとフランス、イギリス、イタリア、スイスなどが続く。これらは、旅行会社の宣伝効果も大きく影響しているようにも思われる。その他、児童では、10位以内に、中国、ブラジル、スペインが入っているが、短大生では、10位以内にカナダ、インドが入っていて、中国が入っていない。これは、児童が歴史の授業で、日本は中国から多くの影響を受けていることを学習しているからかもしれない。ブラジルはサッカーで有名であるため、Jリーグにあこがれる子どもたちにとって、行ってみたい国の一つなのであろう。

知っている国として、児童と短大生が挙げたのは、アメリカ、オーストラリア、中国など共通したものが多い。しかし、東南アジアの国では、韓国が上位にあるだけで、フィリピン、マレーシア、インドネシアなどの国を挙げた者は、全体の20%に満たなかった。日本が同じアジアの一員でありながら、知っている国として中国と韓国しか挙がってこないという事実注目したい（表1、表2参照）。これも欧米諸国を優先するマスメディアの影響だとも考えられるが、今後、異文化理解教育はどうあるべきか、という課題への一つの重要な示唆を提供しているように思われる。

表1 行きたい国の順位

	児 童	短大生
1位	アメリカ	オーストラリア
2位	オーストラリア	アメリカ
3位	中 国	イギリス
4位	イギリス	フランス
5位	フランス	スイス
6位	イタリア	イタリア
7位	ドイツ	オランダ
8位	ブラジル	カナダ
9位	スペイン	ドイツ
10位	スイス	インド

表2 知っている国の順位

	児 童	短大生
1位	アメリカ	アメリカ
2位	中 国	オーストラリア
3位	オーストラリア	中 国
4位	ドイツ	フランス
5位	イギリス	イギリス
6位	インド	インド
7位	フランス	イタリア
8位	ブラジル	ロシア
9位	イタリア	韓 国
10位	スイス	ドイツ

引用文献

- 1) 東京学芸大学附属学校（世田谷地区）Ⅰ. 児童・生徒の社会認識の発達と深化（世田谷地区）
東京学芸大学附属学校研究紀要、第9集、25-29、1980.
- 2) 喜多村晃・倉島民雄・岩本廣美・根本徹・森清隆・村野芳男・田中秀夫・中野智彦 子どもの国際理解と学習・生活経験 社会部会（小金井地区） 東京学芸大学附属学校研究紀要、第19集、42-61、1992.
- 3) 吉森護・永井滋郎・太鼓矢晋 国際理解テスト（APWUI）の標準化 広島大学教育学部学部附属共同研究体制研究紀要、第3号、73-79、1974.